

連隊が石川岳に集まる中、追尾する米軍の攻撃をさけるため、恩納岳へ遊撃戦の拠点を移動させました。この後6月初めの恩納岳撤退まで、第二護郷隊長配下に特設第一連隊の部隊、海軍部隊を置き、遊撃戦を展開しました。

先述した飯田邦光さんは「中頭地区から敗走してきたわれわれ飛行場部隊は連日の戦闘で頬がこけ、くぼんだ眼だけを獣のように光らせ」ながら、何とか恩納岳までたどりつきました。恩納岳の茅葺き兵舎で、護郷隊の少年兵から「握り飯一個ずつを恵まれ」、「世の中でこんな美味しいものがある」と思い、「涙がでるほど嬉しくて、故郷に帰ったような安らぎを覚えた」ことを書き残しています。

第二護郷隊員の平良邦雄さんは、故郷大宜味で軍に供出するための木の伐採をしていた時に可愛がられた渡辺中尉という将校に、偶然に恩納岳で再会しました。その将校は恩納岳に来るまでに軍服はボロボロで、帽子、軍刀、銃もなく、持っていたのは飯盒だけで、食糧を探しに来たとしかみえない様子でした。平良さんが持っていた玄米を少しわけて、缶詰で炊いてあげると、その将校は「炊き終わらないうちに、熱いのを、待ち切れなくて」食べました。

一方で日本兵が食料を奪おうとする事件も起きていました。字恩納の山城稔さんは自家生産の籾などを運び入れ、祖父母、弟の4人で恩納岳の避難小屋で生活していました。その小屋に日本兵が来て、「君たちは日本軍の米を盗んできたのだろう」と銃で脅し、米を持ち去られそうになります。山城さんは別の知り合いの日本兵に通報し、駆けつけた日本兵が、米を持ち去ろうとしていた日本兵を追い払い、米を持ち去られることはありませんでした。

この他にも厳しい状況におかれた兵士や、「敗残兵」と化した日本兵を見た住民証言、護郷隊の証言があり、深刻な食糧不足に陥っていたことがわかります。

◆安富祖に立つ慰霊碑

現在、恩納村で戦闘した第44飛行場大隊の慰霊碑が安富祖の第二護郷隊之碑のそばにあります。その碑文に米軍上陸から恩納岳での戦闘の様子が記されて



第四十四飛行場大隊之碑 2016年撮影

います。

碑文の最後には大隊の242名の将兵が戦死したと記されています。この慰霊塔は「屋良の友の会」によって管理され、毎年6月23日に慰霊祭を行っています。現在のはうるま市の天台宗地蔵院の住職金城永真さんによって、祭壇が設けられ、来られる方を迎えています。

2016年6月に戦没者として刻銘されている東鎮男さんのご親族が来られ、村史編さん係で案内しました。「自分のおじが恩納岳で死んだということしか戦死公報でわからず、平和の礎と慰霊碑を訪れたい」とのご希望でした。「20歳で人生の経験も浅く、何もできなかったであろうおじのことを思うとつらい」とおっしゃっていました。

沖縄戦から75年、今もなお恩納岳での戦争についてはわからないことが多く、村史編さん係では引き続き調査をすすめていきます。(瀬戸)

参考文献・参考史料

- 防衛庁防衛研修所戦史部「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」朝雲新聞社 1968年
- 恩納村遺族会「恩納村民の戦時物語」2003年
- 飯田邦光「中・北部戦線 生き残り兵士の記録 沖縄血戦」JCA出版 1985年
- 沖縄県教育委員会「沖縄戦研究Ⅱ」1999年
- 三上智恵「証言 沖縄スパイ戦史」集英社新書 2020年